

知った上で、予防接種を受けなかった場合の高いリスクと比較し、判断する必要があります。

接種後に気になる症状が見られたときは、接種を受けた医療機関あるいは近くの保健所・保健センターに早めに相談する必要があります。

(5) 接種不適當者

高校3年生に相当する年齢では結婚している人もいます。麻しん風しん混合ワクチンの接種にあたっては、妊娠していないこと、妊娠している可能性がないことを確認するために予診をつくることが重要です。また、接種の後は、2ヶ月間妊娠を避ける必要があります。予防接種法でも、麻しん風しん混合ワクチン、麻しんワクチン、風しんワクチンの接種に当たっては、妊娠している人は接種不適當者（接種禁忌者）に該当します。

妊娠している人がどうして接種不適當になるのかを説明します。まず、妊娠中は妊婦の免疫状態が低下することが分かっています。免疫が低下した状態の時に、麻しん風しん混合ワクチンや麻しんワクチン、風しんワクチンのような生ワクチンの接種を受けることは勧められません。

特に、妊婦が妊娠初期に風しんにかかると、胎児に異常（先天性風しん症候群：4（3）参照）があらわれることがあります。一方、ワクチン接種の場合（妊娠中に風しんワクチンを接種してしまったとき、あるいはワクチン接種後まもなく妊娠したときなど）には、出産した児に異常があらわれたという報告はありません。しかし、ウイルスが胎児に侵入する可能性が完全には否定できないので、心配を避ける意味で、妊娠中には風しんワクチン（及びその他麻しんなどの生ワクチン）の接種は行なわないようにし、接種後の妊娠も2ヶ月は避けるようにします。したがって、万が一、接種後2か月以内に妊娠が明らかになっても、これまでに風しんワクチンによる先天性風しん症候群の発生は報告されていませんので、そのことのみを理由に妊娠を中断する必要はありませんが、そのようなことを悩むことを避ける意味でも、妊娠に関しては十分な注意を行います。

（風しん対策の強化について2004.9.9. <http://idsc.nih.go.jp/disease/rubella/rec200408.html>:厚生労働省通知および緊急提言（風疹流行および先天性風疹症候群の発生抑制に関する緊急提言：厚生労働科学研究費補助金新興・再興感染症研究事業分担研究班「風疹流行にともなう母児感染の予防対策構築に関する研究」8頁参照）

また、これは全員に共通しますが、接種を受ける直前の体温が37.5℃以上あった人、ワクチンを受ける3か月以内にガンマグロブリン（血液製剤の一種で、重症の感染症の治療などに使われます）の注射を受けた人あるいは輸血を受けたことがある人、最近他の種類のワクチン*6を受けたことがある人、重い急性の疾患にかかっている人、ワクチンに含まれる成分（接種医におたずねください）でアナフィラキシーという重いアレルギー反応を起こしたことがある人、接種医が接種しない方が良いと判断した場合には、その日は接種を受けることができませんので、今後の予定を相談しておくとい良いでしょう。

*6 前に接種した予防接種の種類によってあけるべき間隔が異なります。

- 麻しん、風しん、BCG、ポリオ、水ぼうそう、おたふくかぜ、黄熱ワクチンなど生ワクチンの後は27日以上、
- インフルエンザ、三種混合（百日せき・ジフテリア・破傷風）、二種混合（ジフテリア・破傷風）、日本脳炎、A型肝炎、B型肝炎、狂犬病、肺炎球菌、Hibワクチンなど不活化ワクチンの後は6日以上